

甘檜丘東麓遺跡の調査

—第171・177次

1 第171次調査の概要

甘檜丘は、飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵である。丘陵は多数の谷が入り込む複雑な地形を呈し、今回の調査地も南東に開く谷の一つにあたる(図144)。「日本書紀」には、皇極天皇3年(644)に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が甘檜丘に営まれたことが記されている。

甘檜丘東麓遺跡では小規模なものも含め、これまで合計8回の発掘調査を実施しており、7世紀から8世紀初頭にかけて、谷を大規模に造成し、土地利用をおこなった様相があきらかとなっている。また、これまでの調査により、3時期の遺構変遷が把握されている。Ⅰ期が7世紀前半から中頃まで、Ⅱ期が7世紀後半、Ⅲ期が7世紀末から8世紀初頭までにあたる。

第75-2次調査(『藤原概報 25』)では、谷の入口付近にあたる、今回の調査区のすぐ南側で発掘調査をおこない、7世紀中頃の焼土層を確認し、多量の土器片、焼けた壁土、炭化木材などが出土した。また、第161次調査(『紀要 2011』)では、谷の入口へと下がっていく部分で、被熱して硬化した面、炭や焼土塊を多量に含む土層、石敷等を、北側の丘陵尾根中腹部で柱列を確認した。

第171次調査は、丘陵裾の平坦部における遺構の広がりの確認、第161次調査で検出した石敷や硬化面の全容解明、谷入口部付近の土地利用の様相の解明を主な目的としている。調査面積は880㎡で、2011年9月22日に開始し、2012年4月26日に終了した。

2 第171次調査検出遺構

検出した遺構は、調査区北半の丘陵裾部と調査区西南部の谷部で大きく様相が異なる(図145、巻頭図版5)。まず丘陵裾部の遺構、次に谷部の遺構の順に説明する。

丘陵裾部の遺構

調査区北半の丘陵裾部は後世の耕作によって地山まで大きく削られているが、もとは調査区北端から南東隅に向かって尾根筋が走っていたとみられる。耕作にともなう東西方向の溝が残るが、古代の遺構の残りは悪い。

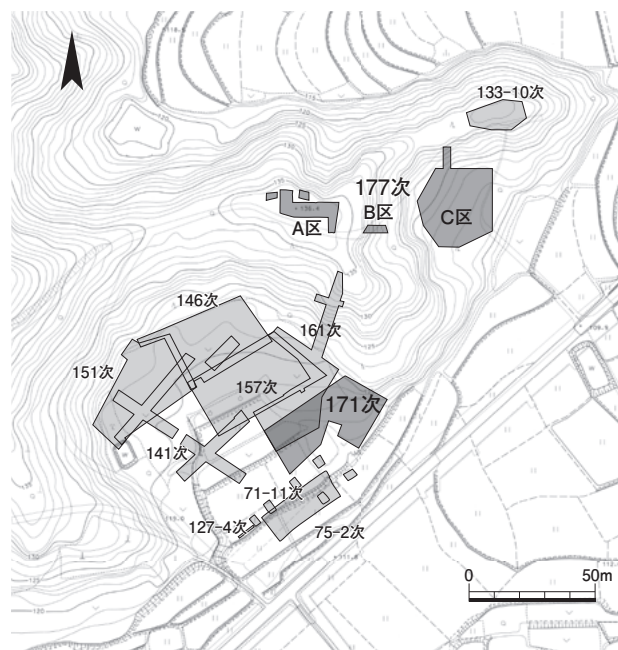


図144 第177・171次調査区位置図 1:3000

竪穴建物SI222 調査区北部にある竪穴建物。第161次調査で、カマドをもつこと、西南辺中央に入り口部が張り出すことが確認されている。今回の調査では東南隅を新たに検出し、長辺4.7m、短辺3.0mの隅丸長方形を呈することが確定した。

柱列SA226 調査区西寄り、谷の落ち際にあるL字状に曲がる掘立柱列。北西-南東方向の4間分、北東-南西方向の2間分を確認した。柱間寸法は約1.5mである。

柱列SA225 調査区ほぼ中央にある北東-南西方向の掘立柱列。3間分を確認した。柱間寸法は約3m。柱穴は2時期あり、北へずらして建て替えている。

柱列SA256 調査区ほぼ中央にある北西-南東方向の掘立柱列。3間分を確認した。柱間寸法は2.4m。柱痕跡の径は約20cm。SA225とT字状ないし十字状に交差する可能性がある。柱穴の断割調査はおこなっていないが、一時期のみと思われる。

柱列SA224 調査区ほぼ中央にあり、SA225と交差する掘立柱列。3間分を確認した。柱間寸法は2.0mである。

谷部の遺構

谷SX200 調査区西南部は、南東に開く谷SX200の北東側斜面にあたり、南西へと下がっていく地形である。第161次調査の成果から、この谷の造成は、本調査区北西側の第157次調査区で検出された石垣SX100(Ⅰ期:7世紀前半から中頃まで)とほぼ同時期か、わずかに遅れる時

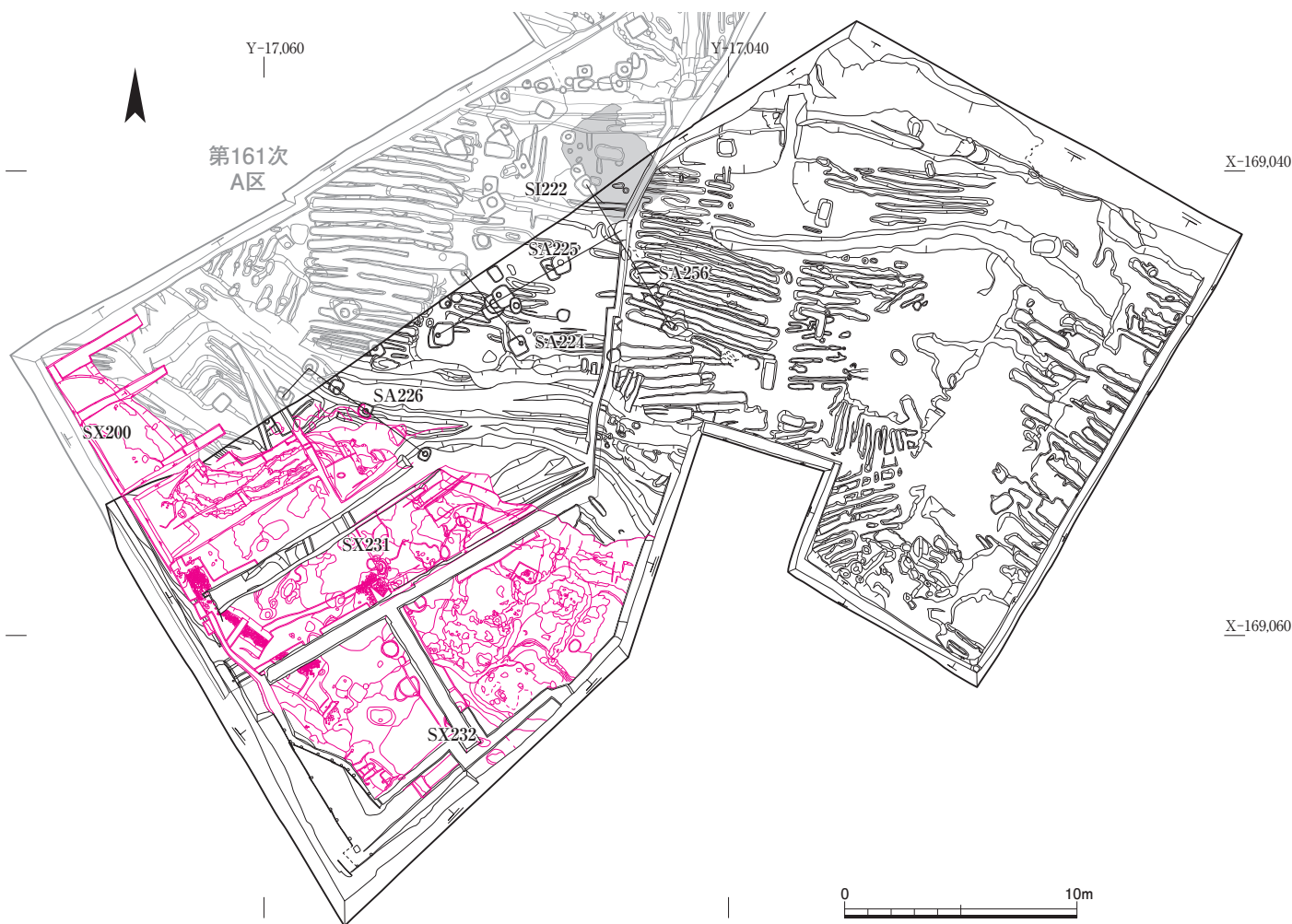


図145 第171次調査遺構図 1:300

期とみられる。

上段平坦面SX231・下段平坦面SX232 谷SX200の北東側斜面を人工的に削って造成し、上下2段の平坦面を造り出している(図145)。このうち、上段平坦面SX231では硬化面・赤色化面・方形遺構・石敷等を検出し、下段平坦面SX232では掘立柱建物・炭溜り等を検出した。

谷埋立土SX230・炭混層SX201 谷部の上・下段平坦面の遺構廃絶後、上段平坦面SX231の西半を中心に、炭片や焼土塊が多量に混じった土(炭混層SX201)が厚いところで20cm程度堆積する。さらにその上層には、厚さ1.5m程度の土(谷埋立土SX230)が堆積する。谷埋立土SX230は、地山由来の緑灰色砂質土と黄褐色粘土ブロック、花崗岩パイラン土が混じる。谷の北東から南西方向へ傾斜して堆積し、各層の下端は炭混層SX201の直上に接する。炭混層SX201の堆積後、谷を埋める際に、谷の落ち際から土を入れ始め、谷の北東側斜面に沿って低い方へ作業を進め、谷を一気に埋め立てたと判断される。今回の調査では、この谷埋立土SX230を掘り下げる際に、まず断割トレンチにより層序を確認し、一層ずつ平面的に各層の

広がりや層を確定し、遺物を分けて取り上げながら掘り下げた。谷埋立土SX230から出土した土器は、層を越えて接合するものがある。

また、炭混層SX201および谷埋立土SX230からは、飛鳥Iの新しい段階およびそれ以前の土器が出土しており、以下に説明する上・下段平坦面の遺構は、すべてこの時期以前、従来の遺構変遷のI期に該当する。(小田裕樹)

上段平坦面SX231で検出した遺構

硬化面SX233 上段平坦面SX231の中央やや西寄りには、灰色、橙褐色から暗赤褐色を呈する硬化面が存在する(巻頭図版5)。これらは被熱して硬化したものと考えられ、大きく3カ所に分かれる。東から順に硬化面SX202、硬化面SX233、硬化面SX234と呼び分ける。

硬化面SX233は、北北東-南南西に主軸をもち、残存長約5m、残存幅約1.6mの細長い平面形状である。褐色からオリーブ褐色の砂と黄褐色粘質土を3~10cmの厚さで互層状に積み重ねて基盤とし、その上層に赤褐色に変色した粘質土の硬化面が厚さ1~2cm程度残る。上面はほぼ平坦で北北東側がわずかに高い。西辺では硬化面



図146 谷部の遺構図 1 : 150

が高さ10cm程度立ち上がる部分が残りに、上部構造へつながるものと推定される (図147・148)。しかしその上部が削平され残っておらず、構造は不明である。

石敷SX203 第161次調査で一部を検出した石敷。灰色砂層上に直径10cm程度の石を敷き並べる。今回の調査で東西約2m、南北約1.4mの範囲に石が残存することがあきらかとなった。石の上面には粉炭が薄く堆積し、その上に炭混層SX201が堆積している。この石敷SX203は、硬化面SX233の北端から約2.2m南南西に存在し、両者はほぼ幅をあわせて重複するため、一連の施設である可能性がある。

硬化面SX202 北北東-南南西に主軸をもち、残存長約5m、残存幅約2mの細長い平面形状である。硬化面SX233の一部を壊し、その上層に褐色砂と黄褐色粘質土を敷いて造られる。硬化面の上面はほぼ平坦だが北北東側が若干高く、約4m離れた場所で約25cmの高低差をもつ緩やかな傾斜をなす。硬化面SX202は3ヵ所に分かれる硬化面の中で比較的残りが良く、主に灰色ないし黒色、一部橙色から赤色を呈し、硬く焼け締まった面が厚さ3

～5cm程度残る。西辺部には幅50cm程度、浅い溝状にわずかに低くなっている部分がある。硬化面の上面には、炭小片や土器片を含む堅く締まった土が薄く堆積する。

東西溝SD236 硬化面SX202の北端付近から東に伸びる素掘りの東西溝。深さはわずか5cm程度が残る。残存長は4.2m、幅はSX202北端付近で0.5m程度であるが、東に向かって徐々に幅広となり溝底がわずかに高くなる。溝底は赤色化しており被熱したものと考えられる。粉炭や炭片を多く含む埋土から刀子が出土した。位置関係や溝底が被熱していることから、硬化面SX202に関連した施設の可能性があるが、詳細は不明である。

硬化面SX234 硬化面SX202・233の西側には、赤褐色から橙褐色に変色した厚さ3cm以下の薄い硬化面が東西約7m、南北約5mの範囲に少なくとも5面以上、重なって残存する (図149)。いずれもほぼ平坦で、北東に向かってやや高くなる傾斜をもち、東北端が谷SX200の落ち際の斜面に沿って立ち上がる面もある。残存状況が悪く、各面の平面形状や規模を把握することはできなかったため、これらをまとめて硬化面SX234としておく。これら



図147 硬化面SX233・石敷SX203 (北東から)

の硬化面のうち、上層の褐色砂質土が硬化した面は、硬化面SX233を一部壊している。SX202との重複はなく前後関係は不明である。

溝SD235 硬化面SX234の下層で確認した素掘溝。北北東-南南西に主軸をもち、長さ6m以上、幅約0.6m、深さ約20cm。埋土中にやや大きめの炭片を多く含み、水が流れた形跡がないことから、湿気抜き用の溝等、硬化面SX234にともなう地下構造の一部であった可能性がある。硬化面SX234の主軸にあわせて溝SD235が掘削されたとすれば、溝SD235が硬化面SX202・233の主軸とほぼ平行することから、硬化面SX234の少なくとも初期の段階は、硬化面SX202・233と平行する主軸をもっていたと考えることができる。

硬化面SX202・233は、いずれも高熱を受けて硬化した平坦面が細長い平面形状を呈し、北北東側がやや高く、緩やかな傾斜をもつ。これらは窯の床面やその地下構造の一部の可能性があろう。硬化面SX234は形状は不明だが、平坦でやや傾斜をもつことや、被熱によると考えられる変色や硬化などの状況が硬化面SX202・233と類似しているため、同様の遺構と推定される。

方形遺構SX241 硬化面SX202の東側で3基の方形遺構を検出した(巻頭図版5)。比較的残存状況が良好な方形遺構SX241は、褐色砂と黄色粘質土を積み重ねて基盤とし、その上面に直径10~15cm程度の石がまばらに残る(図

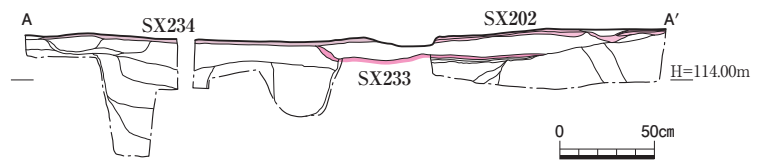


図148 硬化面SX202・233・234断面図 1:40

150)。さらにその上層には、炭片や焼土塊が混じった土が堆積する。平面形は一辺約0.8mの不整形を呈する。

なお、方形遺構SX241の北東側には東西約0.8m、南北約0.4mの範囲で不整形に赤色化した面SX255がある。その他の方形遺構と異なり明瞭な土坑や溝をとまわらない。

土坑SK244 方形遺構SX241の東辺で確認した、直径約0.4m、深さ20cm以上の土坑。

南北溝SD247 土坑SK244に接する幅約0.4mの南北溝。深さ約5cmが残る。長さ約3m分を検出した。

方形遺構SX242 薄い赤色化した面と、炭片が混じった土がたまった浅い落ち込みが、一辺約0.8mの不整形を呈する。残存状況が悪く詳細は不明である。

土坑SK245 方形遺構SX242の東南部の下層で検出した直径0.6m以上、深さ約60cmの不整楕円形の土坑。方形遺構SX242および土坑SK245からは、炭混層SX201、後述する炭溜りSU250出土のものと同一体と考えられる須恵器が出土した。

東西溝SD248 土坑SK245の西に接して確認した幅約0.4~0.5mの東西溝。深さ約2cmが残る。長さ約1m分を検出した。

方形遺構SX243 薄い赤色化した面が、一辺約0.8mの不整形を呈する(図151・152)。残存状況が悪く詳細は不明である。

土坑SK246 方形遺構SX243の東南部の下層で検出した直径約0.6m、深さ約45cmの不整楕円形の土坑。

東西溝SD249 土坑SK246に接し、東に延びる幅約0.6~1mの東西溝。深さ約20cmが残る。長さ約2.5m分を検出

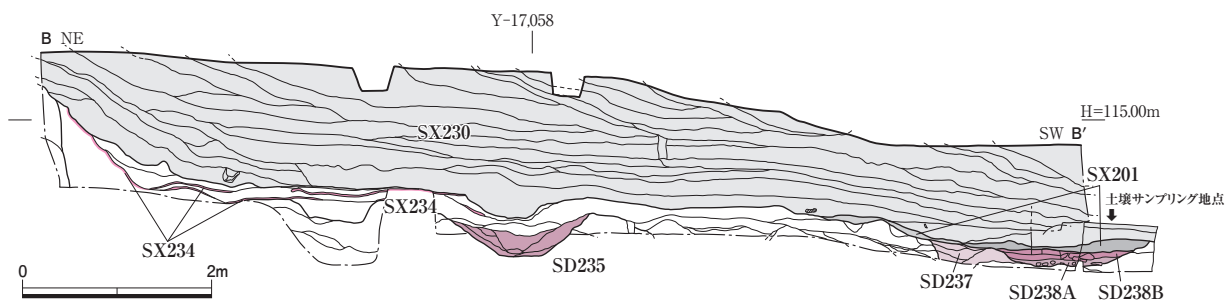


図149 調査区中央アゼ土層図 1:80



図150 方形遺構SX241の状況(北東から)



図151 方形遺構SX243(東から)

した。

方形遺構SX242・243は、石をとまなわないものの、表面のみ薄く被熱して赤色化したと考えられる部分や、炭片が混じった土が残る部分が一辺0.8m程度の不整形に広がる点、それぞれの下層やすぐ横に不整形の土坑をとまなう点、土坑に接して溝がある点など、方形遺構SX241と共通する特徴が認められることから、これら3基の方形遺構は同様な構造である可能性が考えられよう。被熱して赤色化したと考えられる部分があることから、これらは高熱を発する施設の地下部分の可能性が推定されるが、その性格は不明である。

南北溝SD251 東西溝SD249の下層で検出した幅約0.3mの浅い南北溝。

整地面SX239・赤色化面SX240 硬化面SX202の東側では、黄褐色やオリーブ褐色の砂層の基盤土上に黄褐色粘質土を敷いた整地面SX239が東西約6m、南北9m以上の範囲に広がる。黄褐色粘質土は厚さ1~2cm程度残存している。このSX239には、東西幅約2.5m、南北幅約1mの範囲で赤色化している部分(赤色化面SX240)があり、高熱を受けたものと考えられる。

方形遺構SX242から西に延びる東西溝SD248は、整地面SX239を一部壊して掘削される。また、SX239は硬化面SX202とほぼ同じ標高に残存しており、SX202を窯の床面や地下構造とすれば、SX202をとまなう施設を壊して造成、整地されたものと考えられる。SX239を構成する黄褐色粘質土、およびその基盤の砂層自体は、上段平坦面SX231造成時の整地土層の一部が露出したか、その上に敷き直されたものであろう。

赤色化面SX240の上面には、焼土塊が薄く貼り付いて残っている部分がある。SX240は何らかの高熱を発する施設の一部と考えられるが、残りが悪く性格は不明である。ただし、その上面に貼り付く焼土塊は、上部構造の一部が崩れたものである可能性も考えられる。

建物SB252 赤色化面SX240を囲む位置に建つ1×1間

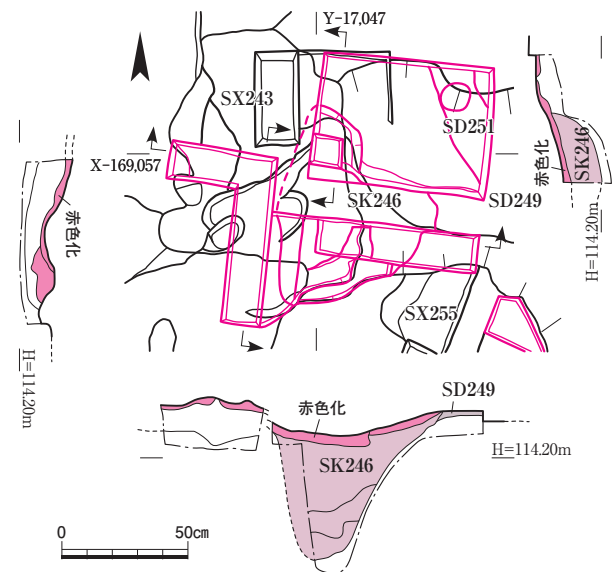


図152 方形遺構SX243周辺の遺構図・断面図 1:30

の掘立柱建物。主軸が正方位に対し大きく振れる。柱間寸法は西北西-東南東方向が約2.4m、北北東-南南西方向が約2.1mである。柱掘方がSX239、SX240の一部を壊して掘削されている。

柱列SA253 建物SB252の西妻から約1.2m西に位置しL字状に屈曲する掘立柱列。北北東-南南西方向に2間分(柱間約1.8m)と、その南端から西北西方向に延びる2間分(柱間約2.6m)を確認した。柱掘方が硬化面SX233・202を壊して掘削されている。建物SB252、後述する建物SB254との関係は不明である。

石敷溝SD238A・B 調査区西南辺にあり、北西から南東に流れる溝で底に石を敷く(図153)。調査区北西隅の南東約4.5m付近でとぎれるが、これは溝が削平され残っていないか、西の調査区外に屈曲するためと考えられる。溝は同位置で石を敷き直し、直径10cm以下の小石を敷く下層の溝SD238Aが残存幅1.2m、拳大の石を敷く上層の溝SD238Bが残存幅1.5mである(図149)。

溝状遺構SD237 石敷溝SD238A・B北東で、これに平行する溝状の落ち込み。西肩は石敷溝SD238A・Bに壊されており、残存幅0.4m、深さ20cm以上である。



図153 石敷溝SD238A・B (北西から)

下段平坦面SX232で検出した遺構

建物SB254 石敷溝SD238の南東側に位置する掘立柱建物。北西-南東に主軸をもち、梁行2間・桁行2間以上。桁行は南東の調査区外へ延びる可能性が高い。柱間寸法は、北東-南西方向が約1.8m等間、北西-南東方向が約2.4m等間である。建物SB254の範囲およびその周辺には、粉炭を多く含む層と粘質土の層が互層をなす入念な整地が施され、特にSB254の内部には、建物の形状にあわせて黄褐色粘質土が薄く敷かれていた。

下段平坦面SX232の一部は、このSB254の形状にあわせるように、上段平坦面の整地面SX231を壊して造成されている。

炭溜りSU250 調査区西南隅で東西約1m以上、南北約3m以上の範囲に残存し、さらに南側の調査区外に延びる。粉炭が1~2cm程度の厚さで面的に広がる層が2面以上あり、その間に炭片などが混じる層が堆積する(図154・155)。炭溜りSU250は、建物SB254周辺に施された整地層中の粉炭を多く含む層の一部が露出したもののほか、谷部に堆積した炭も混じると考えられる。土器や炭化した穀類の粒などが出土し、土器の一部は、第75-2次調査の焼土層SX037出土土器と接合した。

遺構の関係

ここまで述べてきたとおり、これらの上・下段平坦面SX231・232で検出した遺構は、いずれも従来の遺構変遷のI期、7世紀前半から中頃までに属するものである

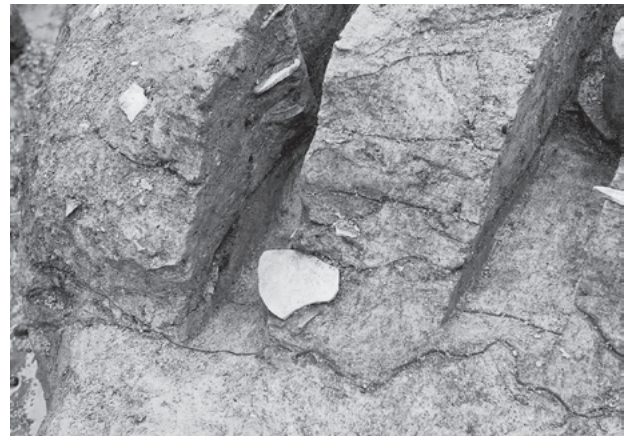


図154 炭溜りSU250土器出土状況(南東から)

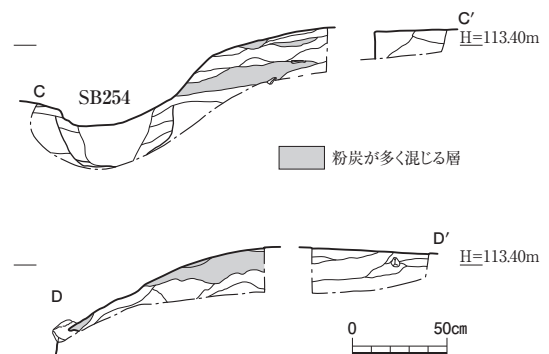


図155 炭溜りSU250断面図 1:40

が、重複するものがあり前後関係がわかる。ここで再度まとめておくと、まず、谷SX200の北東側斜面を造成して上段平坦面SX231を造り出し、硬化面SX233、次いで硬化面SX202をともなう施設が造られる。硬化面SX234をともなう施設については、その一部がSX233をともなう施設を壊しているが、当初はSX233をともなう施設と併存ないしそれより古い可能性もある。

この硬化面SX202をともなう施設を壊した後に、その東側に整地面SX239をともなう造成をおこない、赤色化面SX240をともなう施設、方形遺構SX241・242・243をともなう施設が造られる。なお、土器の接合関係や同一個体と考えられる土器の出土から、方形遺構SX242をともなう施設の廃絶は、炭混層SX201の堆積とほぼ同時と推定される。上段平坦面の建物SB252および柱列SA253は、整地面SX239と赤色化面SX240を切り込んでいる。

下段平坦面SX232および建物SB254は、上段平坦面の整地面SX239を一部壊して造られる。上段の建物SB252、柱列SA253との前後関係は不明である。

これらの施設の存続期間は不明であるが、出土する土器のほとんどが飛鳥Iの新しい段階に属することから、従来の遺構変遷のI期の期間内に、次々と造り替えられたものと推定しておく。

(清野孝之)

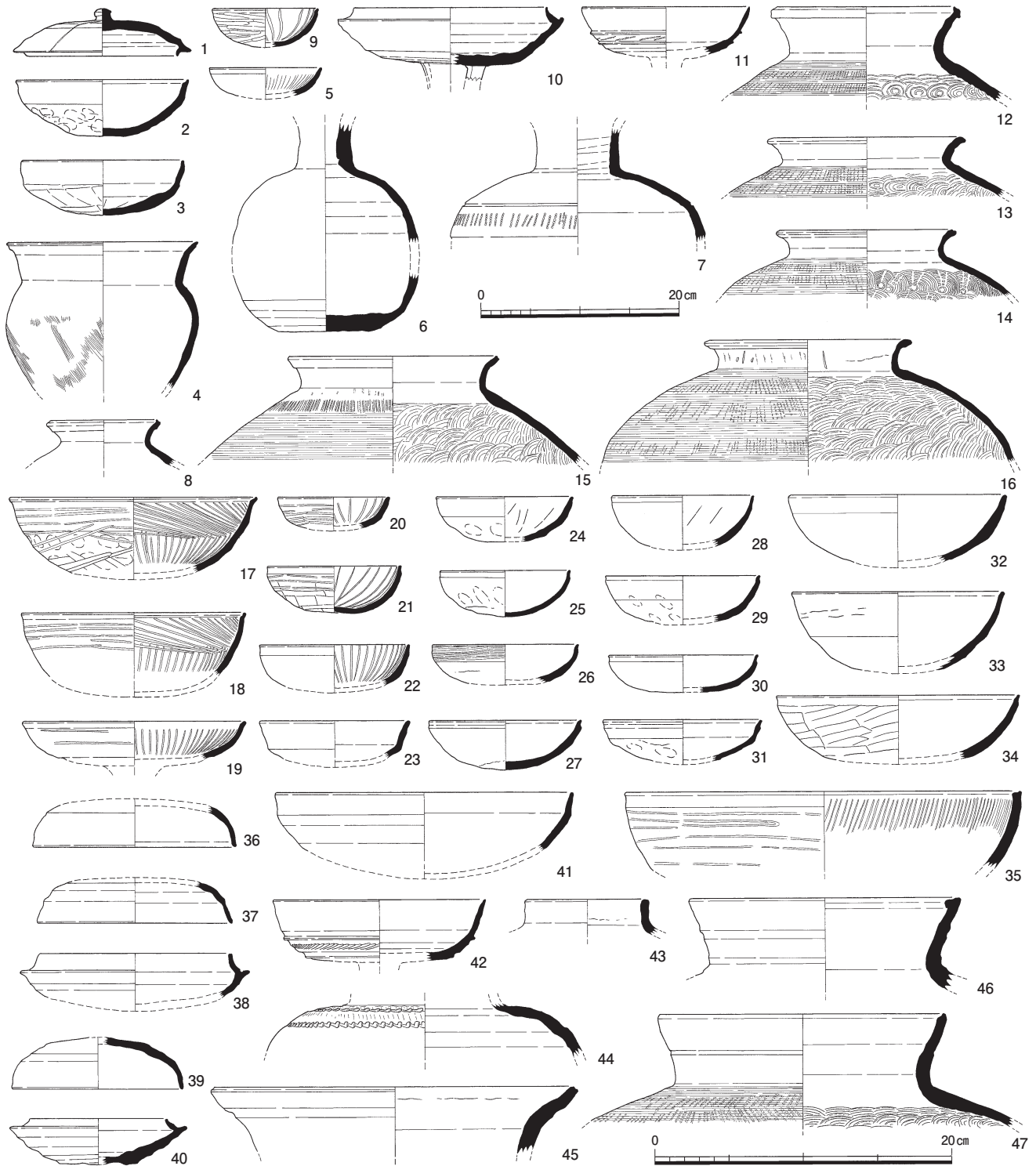


図156 第171次調査出土土器 (1) 1 : 4 (8・12~16は1 : 6)
 (1・2 : 上段平坦面整地土 3・4 : SD251 5・6 : SA253 7 : SB252 8 : 方形遺構SX242 9~16 : 炭溜りSU250 17~47 : 炭混層SX201)

3 第171次調査出土遺物

土 器

今回の調査では整理木箱17箱分の土器が出土しており、その大部分は古代の土師器・須恵器である。以下、谷部のI期の遺構や平坦面整地土、炭溜りSU250、炭混層SX201、谷埋立土SX230から出土した土器についてそれぞれ報告する。

上段平坦面整地土出土土器 1・2は上段平坦面にある整地土から出土した。3基の方形遺構や赤色化面SX240

は、この土層を基盤とする。須恵器杯G蓋(1)は、口径10.1cm。頂部外面にはヘラ記号が入る。土師器碗C(2)は、口縁端部が内傾し、口縁内面に斜めの工具痕が残る。

I期の遺構出土土器 3・4は方形遺構SX243下層の溝SD251、5・6はSA253の柱穴、7はSB252の柱穴、8は方形遺構SX242からそれぞれ出土した。土師器杯H(3)は、ほぼ完形で出土。内面の広範囲に漆が附着する。土師器甕(4)は胴部中位以下にハケ目がみられる。土師器杯CⅢ(5)の暗文は細く、密に施される。須恵器

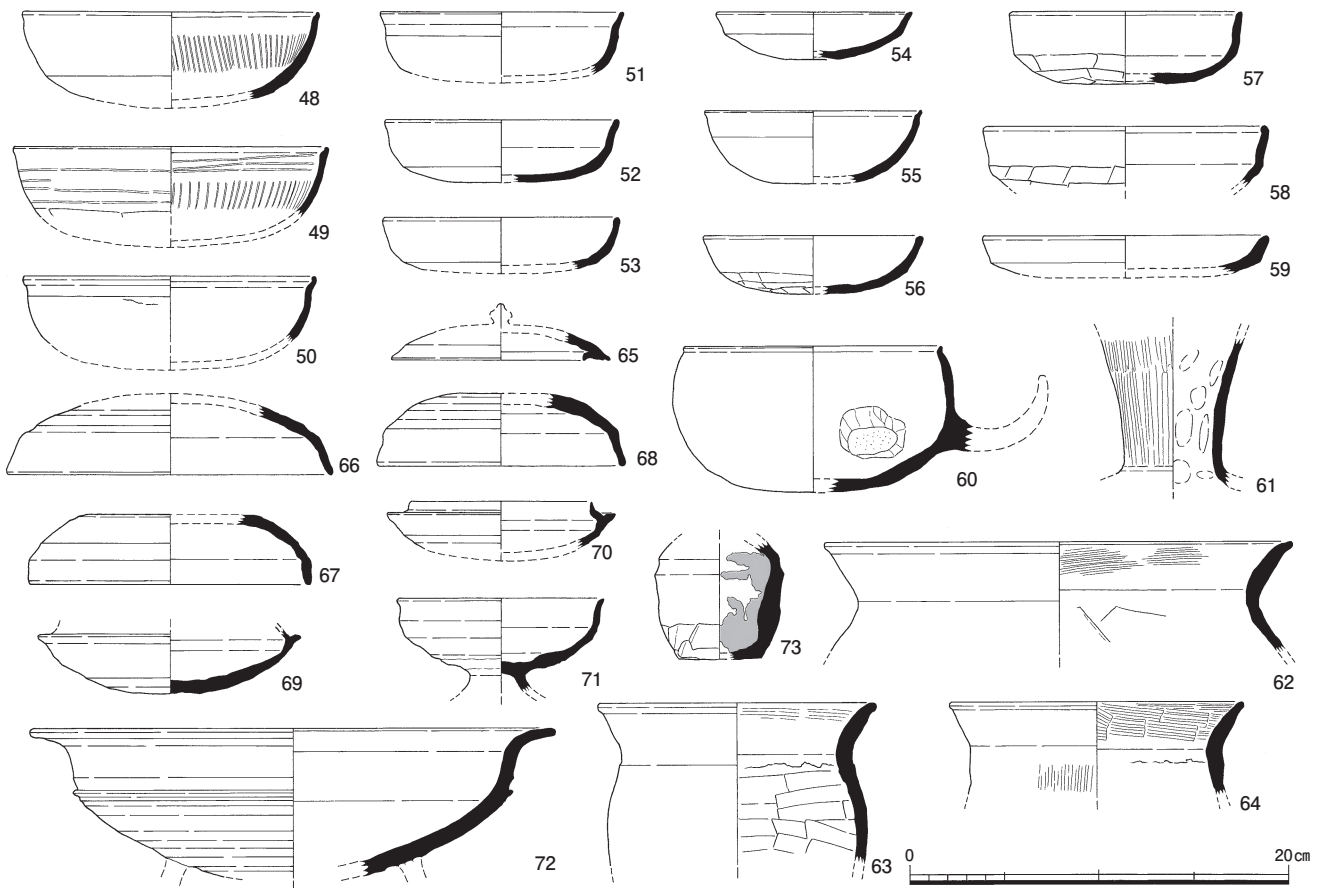


図157 第171次調査出土土器(2) 1:4 (48~73:谷埋立土SX230出土)

瓶(6)は、底部外面をロクロケズリで調整し、外面には広範囲に自然釉が降着する。内面全体には痘痕状の小さな凹みが多数みられる。須恵器長頸壺(7)は、胴部外面に凹線が2条巡り、その間に列点文を施す。外面には自然釉の降着が著しい。須恵器甕(8)は口縁端部内側を摘み上げる。

炭溜りSU250出土土器(9~16) 土師器杯CⅢ(9)はb3手法で調整する。内面には太く揺れの大きい暗文が入る。径高指数は36.6。10・11は須恵器高杯。10は脚部に3方向の透孔を有す。11は外面に2条の稜と列点文がめぐり、内面全体に自然釉が降着する。12~16は須恵器甕。12は焼成が甘く、軟質である。13は口縁部内面と肩部外面に自然釉の降着が著しい。14は内面の当て具が車輪文となる。16は、炭溜りSU250と第75-2次調査の焼土層SX037出土の破片が接合した資料である。胎土に1~3mmの砂粒を多く含む。口縁部外面に「中」、口縁部内面に「|」のヘラ記号を有す。

炭混層SX201出土土器(17~47) 17・18は土師器杯CⅠ。両者とも二段の暗文をもつ。17の調整はb1手法。20~22は土師器杯CⅢ。いずれも暗文は口縁端部にまでおよび、20では揺れが大きい。21はほぼ完形で、調整はb1手法。径高指数は35.5。24~33は土師器杯G。口径9.0~10.5cmのものが主体を占めるが、器高には深いもの(24・25・27~29)、浅いもの(26・30・31)がある。25~27・29

~31は、口縁端部外面に弱い外傾面あるいは凹みをもつ杯Gcである。24・28は口縁部内面に斜め方向の工具痕が残り、26は口縁部外面にヨコハケを施す。土師器高杯C(19)は口縁部外面にミガキを施す。34・35は土師器鉢。34はヨコナデにより口縁端部外面が凹む。

38・40は須恵器杯H、36・37・39は杯H蓋。口径は36~38が13cm前後、40が9.2cm。39・40の外面はヘラ切り不調整で、40の外面には自然釉の降着が著しい。須恵器高杯(42)は杯部外面に稜を有し、その下位に刻み目が巡る。須恵器碗(41)は灰白色を呈す。43・44は須恵器壺。44は肩部外面に波形の文様と縦方向の薄い刻み目が各2周巡る。45~47は須恵器甕。47は口頸部中位に凹線が1条入る。

谷埋立土SX230出土土器(48~73) 土師器には、杯CⅠ(48・49)、杯G(50~55)、杯H(56~58)、皿H(59)、把手付碗(60)、長頸壺(61)、甕(62~64)などがある。48は底部外面をナデ調整し、49は内面上方に横位の暗文、下方に縦位の暗文が入る。50は口縁端部内面にヨコナデによる凹みをもつ。53は内面に残る煤から、灯火器と考えられる。56・57は口縁部と底部の境の稜が不明瞭である。60は把手をもち、胎土には2~3mmの砂粒を多く含む。61は外面に縦位のミガキを密に施す。62~64はいずれも口縁部内面をヨコハケで調整する。63は胴部内面にヘラケズリを施す。

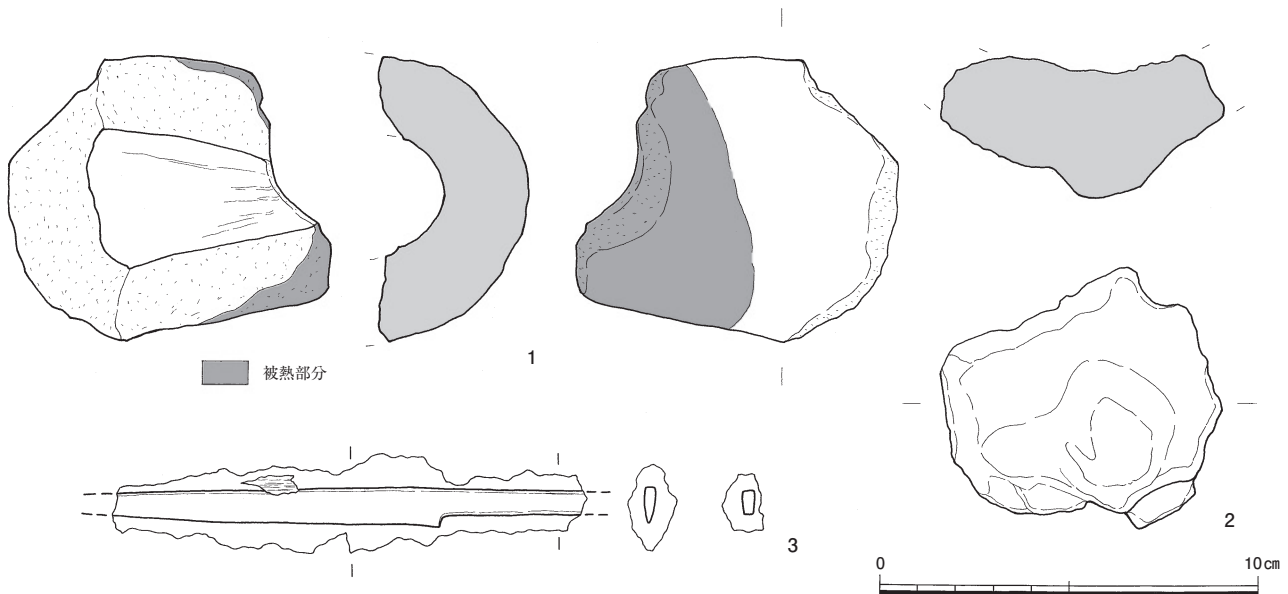


図158 第171次調査出土鉄製品・鍛冶関連遺物 1:2

須恵器には杯H (69・70)、杯H蓋 (66~68)、杯G蓋 (65)、短脚高杯 (71)、台付鉢 (72)、壺 (73)、甕などがある。69・70の底部外面はロクロケズリ。杯H蓋の天井部外面は、66・68がロクロケズリ調整、67はヘラ切り不調整。65は外面に自然釉が降着し、71は口縁部がヨコナデにより外反する。72は体部中位に稜をつくり、底部には脚台の剥離痕がみられる。73は内面と断面に漆が付着し、漆運搬具であったことがわかる。

土器群の様相 谷部のI期の遺構や、平坦面の整地土から出土した土器は量が少なく、それらからの細かな時期比定は困難である。一方、炭溜りSU250、炭混層SX201、谷埋立土SX230からは、比較的まとまった量の土器が出土しており、その評価は本調査区周辺での遺構変遷を考える上で重要である。

谷埋立土SX230の土器群はやや古相を示す須恵器杯H (66・67・69) を含むが、杯G (65) や杯H (68・70) の特徴から飛鳥Iの新しい段階に位置づけることができる。

炭混層SX201出土土器群については、①土師器杯Cの暗文に太いもの、揺れのあるもの、口縁端部にまでおよぶものがみられる、②土師器杯Gが多く、そのなかに杯Gcが一定量存在する、③土師器杯Hが少ない、④口径の大きな須恵器杯H (36~38) がみられる、⑤須恵器杯Gがほとんど見当たらない、⑥須恵器甕片が多い、⑦二次被熱の痕跡を残す破片がある、といった特徴が挙げられる。SX201の土器群は、④にやや古い特徴が看取でき

るが、土師器杯Cの様相や39・40のような須恵器杯Hの存在から、SX230同様、飛鳥Iの新しい段階に比定できる。

炭溜りSU250の土器群に関しては、出土量は多くはないが、上に挙げた①・⑥・⑦の特徴がみられ、SX201の土器群との共通性が読み取れる。また、SU250とSX201出土の土器片が接合する例も存在する。

さらに、今回の整理作業において、SU250出土の須恵器甕 (16) が、第75-2次調査の焼土層SX037出土の甕片と接合したことから、両層が一連の堆積層である可能性が高まった。

一方、炭混層SX201と焼土層SX037の土器群を比較すると、上述したSX201出土土器群の特徴のうち、①~③・⑦の点はSX037の土器群にも看取できる。しかし、④・⑤の点はSX037の土器群には当てはまらず、両者には相違点も指摘できる。

なお、炭混層SX201、炭溜りSU250と、方形遺構SX242およびこれにともなう土坑SK245などからは、同一個体と考えられる須恵器甕片が出土している。この事実は、上段平坦面に存在した方形遺構の埋没と、上段・下段平坦面の大部分を覆うSX201、SU250の堆積との時期関係を知る手がかりとなる。

(若杉智宏)

瓦 磚 類

平瓦は126点 (15,770 g) 出土しており、うち、中近世のものを36点 (4,090 g) 含む。丸瓦は60点 (5,640 g) 出

土しており、うち中近世のものを3点(490g)含む。椀瓦は2点(370g)、軒瓦は2点出土した。軒瓦の内訳は、重弧文軒平瓦1点、軒椀瓦1点で、いずれも表土中からの出土である。このほか榛原石1点(500g)が出土している。調査面積に対して瓦の出土量は少なく、調査区内に瓦葺き建物の存在は想定しにくい。(清野)

焼土塊

土器や瓦とはあきらかに異なる焼土塊が整理箱5箱分出土した。この中には植物圧痕を残すものが多く見られるが、これについては後述する。

鉄製品・鍛冶関連遺物

鞆の羽口(図158-1)は谷埋立土SX230出土で残存長8.5cm、残存幅7.5cm、厚さ2.2cmで、図示した通り黒色化部分が明瞭に観察される。椀形鉄滓(図158-2)も谷埋立土SX230から出土で残存長7.3cm、残存幅6.9cm、厚さ3.3cm、重さ185.9gである。鉄刀子(図158-3)は東西溝SD236出土で残存長12.5cm、幅2.7cm、厚さ1.3cm(残存金属部分は0.4cm)、腐食が著しい。

4 第171次調査出土植物遺体

大型植物遺体

今回の調査では炭化材が整理箱3箱分、種実類が整理箱3箱分出土したほか、加工木・燃えさし・雑木などが整理箱1箱分出土した。掘削時に見いだされた大型植物遺体の他に、現場から採取した土壌サンプルに対する手動あるいは機械を用いた浮遊選別により、大量の植物遺体を回収した。浮遊物に関しては2mmおよび0.5mmの篩による選別をおこなったが、このうち0.5mmの篩にかかったものは分析用サンプルとして未選別のまま別途保管してある。回収された大型植物遺体を肉眼および実体顕微鏡で観察し、炭化材、炭化単子葉植物、炭化種実、未炭化種実その他に分類した。このほか土器や瓦とはあきらかに異なる、焼土塊の表面および内部に明瞭な植物圧痕を残すものも多くみられたため、これを植物圧痕として分類した。

炭化材(図159-5) 20cm前後の大型のものから微細な破片まで多岐にわたるが、仮道管が明瞭に観察されるために針葉樹とわかるものが多数ある。用途などに対する細かな議論のためには、樹種同定の必要がある。

炭化単子葉植物(図159-4) 年輪を形成せず明瞭な節を持

つなどの特徴を根拠に木材とは区別できるものを指す。由来の候補となる植物はイネ科植物のワラやタケ亜科など広範囲におよぶため、これも専門的な樹種同定が必要である。

炭化種実(図159-1~3・6) 農耕研究の経験から筆者でも識別可能なモモ、イネ、コムギなどの他に、ドングリやマメ類を含む多彩な形態の遺体が確認された。より細かな内容の把握のためには専門家による同定が必要である。コムギがきわめて多量に出土していることは、これらの植物遺体が一度に炭化することになった出来事の起こった季節性を示す可能性もある。

未炭化種実その他 端的には上記3分類に該当しないものの寄せ集めである。湿地環境におかれていた場合は未炭化の植物遺体が遺存する可能性があるが、現生植物のコンタミネーションの可能性が常につきまとうために注意が必要である。たとえば選別によって昆虫遺体が10数点回収されたが、顕微鏡で細かく観察すると、1,000年を超えて土中で遺存するとは考えにくい細部の組織まできわめて明瞭に残っていることが確認できた。こうしたものは、すべて現生のものである可能性が高い。しかし溝状遺構SD237から出土した未成熟のマメ類遺体(図159-8)はAMS¹⁴C年代測定によって古代のものであることが確認された(測定番号PED-22257、2σ暦年代範囲580AD-655AD)。古代の、鞆の部分が残存する未成熟なマメ類遺体が出土する事例は珍しく、この溝の埋没時期の季節性を示すものと考えられる。

植物圧痕をもつ焼土塊(図159-7) 短い平行線が不規則な方向に観察されるものがほとんどで、木材の痕跡の残る資料は未確認である。

以上の大型植物遺体の分析から、建造物の建築部材(炭化材)や屋根材(炭化単子葉植物)、壁材(植物圧痕をもつ焼土塊)となる要素がそろっているようにも想像できる。より厳密な議論のための正確な植物学的同定が、今後の課題となる。

小型植物遺体

大型植物遺体と同じ方法では回収できない小型植物遺体については、土壌サンプルを採取して専門家の分析に供した。試料採取にあたっては、調査区の中で花粉・珪藻遺体が遺存している可能性が高く、かつ層位的に連続して同地点での環境変化を追える場所を探した。その

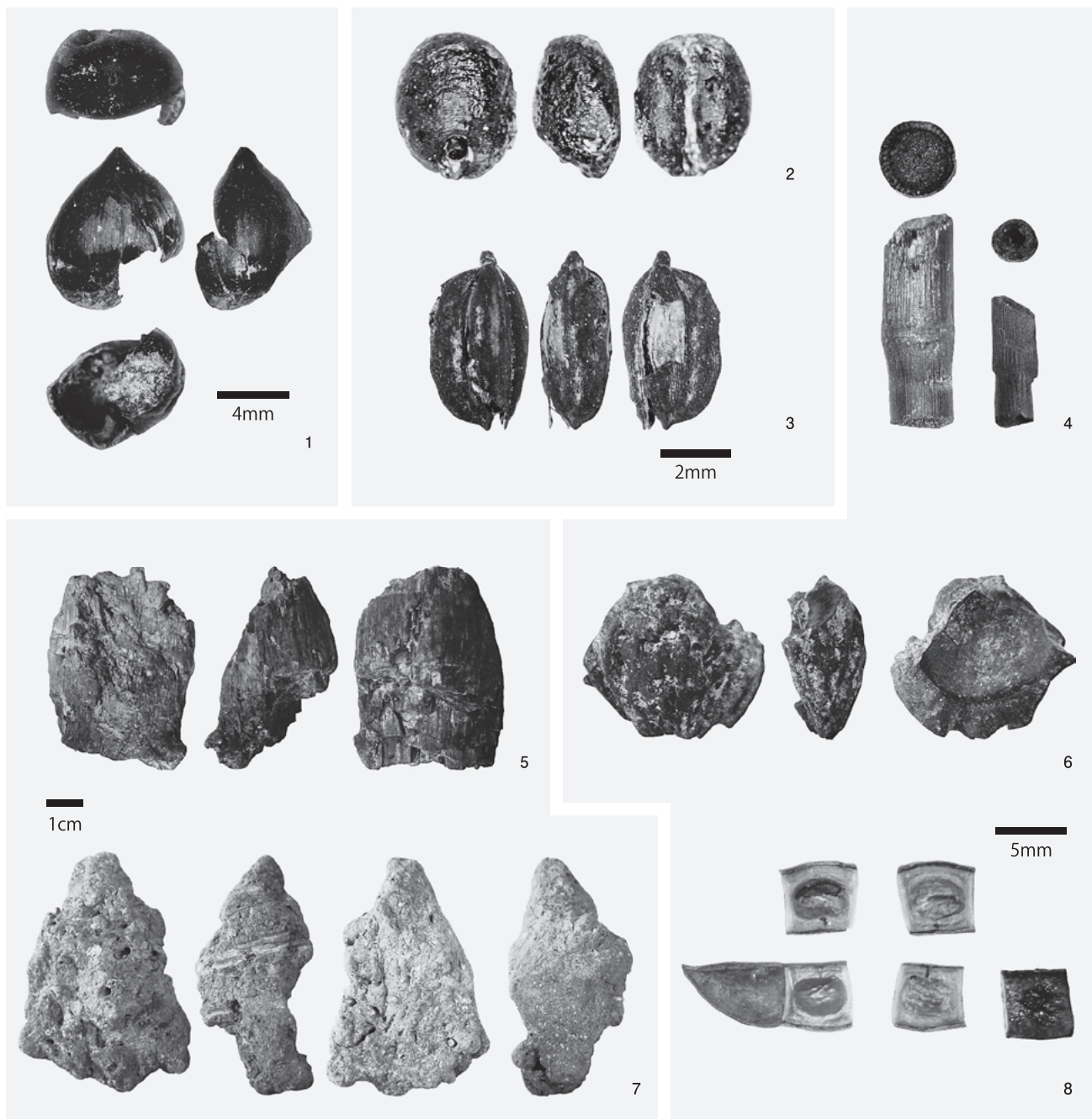


図159 第171次調査出土大型植物遺体

(1：堅果類、2：コムギ果実、3：イネ穎果、4：炭化単子葉植物、5：炭化材、6：モモ核、7：植物圧痕のある焼土塊、8：マメ類の鞘)

結果、地山の上に掘られた2条の石敷溝SD238A・Bが重複し、さらにその上に炭混層SX201がかぶさる調査区西壁付近のアゼにサンプリング地点を設定した(図149)。さらに、硬化面SX234の硬化面とその直上の層、炭溜りSU250から、それぞれの構成植物を調査するためのプラント・オパール分析用試料を採取した。花粉分析は森将志(パレオ・ラボ)、珪藻分析は藤根久(パレオ・ラボ)、プ

ラント・オパール分析は杉山真二(古環境研究所)がそれぞれ担当したが、ここではその結果を要約して記述する。

(庄田慎矢)

花粉分析(図160) 検出されたのは、分類群数で樹木花粉25、草本花粉18、シダ植物孢子3の総計46であるが、炭混層SX201では花粉の残存状況は良好でなかった。まず、地山と石敷溝SD238Aの間には花粉組成の差が顕著

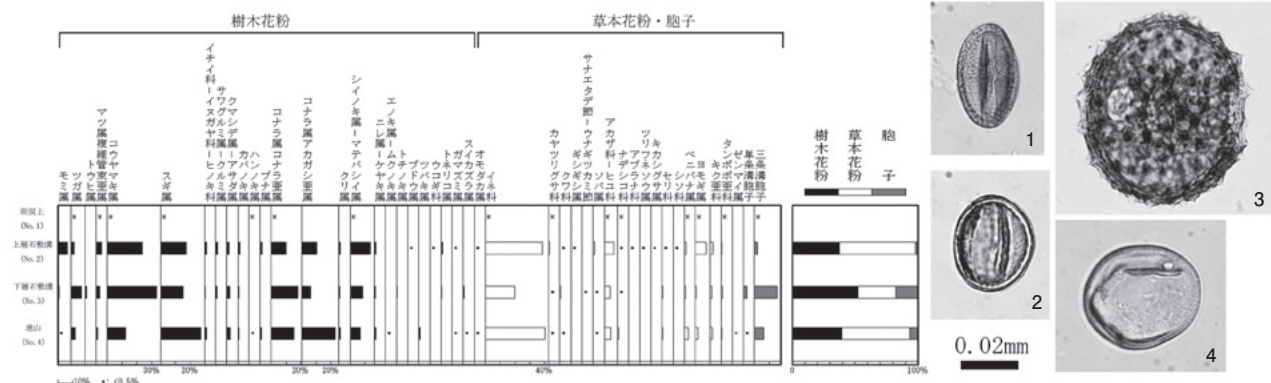


図160 甘樫丘東麓遺跡（第171次調査）における花粉分布図および花粉の顕微鏡写真
 (1:ソバ属, 2:コナラ属アカガシ亜属, 3:ベニバナ属, 4:イネ科)

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。
 *は樹木花粉 200 個未満の試料において、検出された分類群を示す。

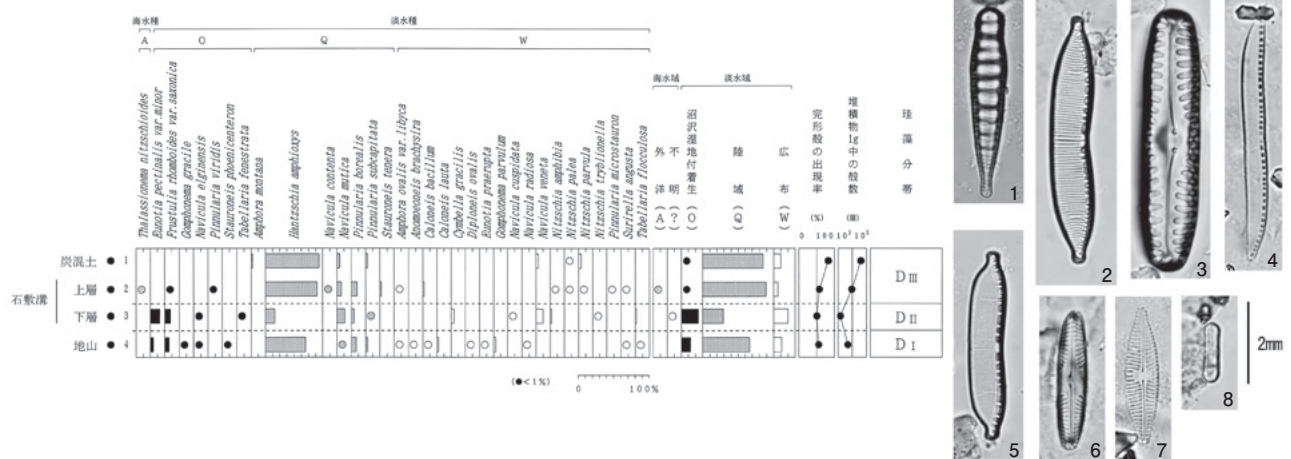


図161 甘樫丘東麓遺跡（第171次調査）における珪藻化石分布図（0.1%以上の分類群を表示）および珪藻化石の顕微鏡写真
 (1: *Meridion circulae* var. *constricta*, 2: *Hantzschia amphioxys*, 3: *Pinnularia borealis*, 4: *Nitzschia parvula*,
 5: *Hantzschia amphioxys*, 6: *Pinnularia subcapitata*, 7: *Navicula veneta*, 8: *Navicula contenta*)

でないため、同遺跡の造営にあたって周辺の大規模な植生改変はおこなわれていなかったと推定される。すなわち、遺跡の形成と前後する時期には照葉樹林要素のシノキ属-マテバシイ属、二次林要素のコナラ属コナラ亜属やマツ属複雑維管束亜属、温帯性針葉樹のスギ属やコウヤマキ属といった樹木からなる森林が周囲に広がっていた。甘樫丘の名にある樫（コナラ属アカガシ亜属）も一定量の産出が見られ、構成種の一つとして生育していた。

草本花粉ではイネ科がもっとも多く産出しており、水生植物のオモダカ属（石敷溝SD238B・地山）やキカシグサ属（石敷溝SD238B）をともなう。オモダカ属やキカシグサ属は水田雑草を含む分類群であり、これらの花粉は遺跡周辺に広がっていた水田や風媒花であるイネからもたらされたものであろう。

また、石敷溝SD238A・B、地山の3層でソバ属花粉が産出したため、7世紀前半以前から同時期にかけてソ

バ栽培がおこなわれていたと推定される。この時期は、上中央子（「畿内地域におけるソバ属花粉の分布の変遷」『考古学と自然科学』57、2008）が指摘した畿内地域のソバ栽培の変遷の中で、ソバ栽培が定着した時期に当たる。なお、ソバは花粉生産量の少ない虫媒花であり、花粉は広範囲に散布しないと考えられるため、ソバの栽培地は試料採取地点のごく近辺であったと推定される。

さらに、本遺跡ではベニバナの花粉が全試料から産出した。ベニバナも前述のソバ属同様に花粉生産量の少ない虫媒花であるため、丘陵上や遺跡のごく近辺にベニバナの栽培地があり、そこから直接花粉が供給された可能性が考えられる。（森 将志/パレオ・ラボ・庄田）

珪藻分析（図161） 検出された珪藻化石は、海水種2分類群2属2種、淡水種46分類群20属29種4変種であった。これらの珪藻化石を環境指標種群に分類した結果、①地山：沼沢湿地環境をともなうジメジメとした陸域

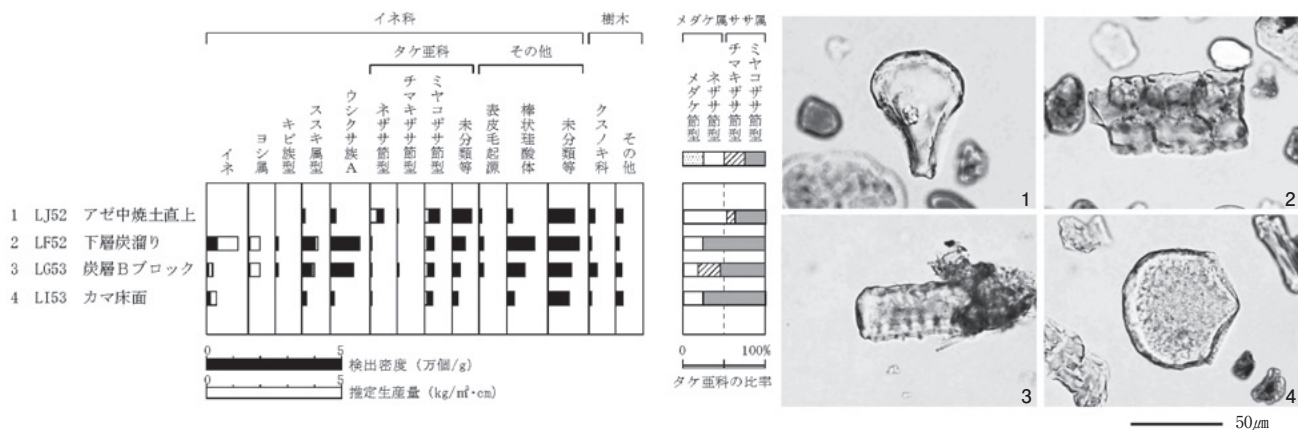


図162 甘樫丘東麓遺跡(第171次調査)における植物珪酸体分析の結果および植物珪酸体の写真
(1:イネ、2:ススキ属型、3:キビ族型、4:ヨシ属)

環境→②石敷溝SD238A:下位の地山の珪藻化石の組成に類似→③石敷溝SD238B・炭混層SX201:ジメジメとした陸域環境、という環境変遷が復元された。炭混層SX201から陸域指標種群が特徴的に出土したことは、同層から花粉の産出量が少ないことと整合的である。

この結果により、少なくとも石敷溝SD238Bは、常に水が流れたり滞水したりする施設ではなかったと考えられる。また、石敷溝SD238Aについても、流水があったことは想定しにくい。遺構解釈の上で一つの材料となるであろう。(藤根 久/パレオ・ラボ・庄田)

プラント・オパール分析・灰像分析(図162) 硬化面SX234から採取した試料1(硬化面直上層)、4(硬化面)、2(SU250の粉炭が多く溜まった部分)、3(SU250の炭層ブロックサンプル)、の計4点を分析した。このうち、試料2と3では炭化材片とともにワラ状の炭化物が認められ、試料4でも微細な炭化物が認められた。これらについては灰像分析をあわせておこなった。結果、試料2と3の炭化物では、ススキ属の葉部に由来する灰像組織が比較的多く検出され、試料4でも少量検出された。試料3の炭化物では、イネやキビ族の葉部に由来する灰像組織も少量検出された。よって同遺構で検出されたワラ状の炭化物の給源植物は主にススキ属の葉部と考えられ、イネやキビ族の葉部も少量含まれていると推定される。ススキ属の茎葉(カヤ)の利用については建物の屋根材や壁材などの用途が考えられ、イネ(稲藁)については藁製品(俵、縄、ムシロなど)としての利用も想定される。

土壌試料の植物珪酸体分析では、各試料でススキ属やウシクサ族、メダケ属(ネザサ節)やササ属(ミヤコザサ

節)などの竹笹類、およびクスノキ科などの樹木に由来する植物珪酸体が検出され、部分的にイネ・ヨシ属・キビ族に由来するものも認められた。このような植物については、当時の周辺の植生が反映されていると考えられるが、炭化物の灰像分析で認められたススキ属やイネなどについては、人間に利用された植物に由来する可能性も考えられる。(杉山真二/古環境研究所・庄田)

植物遺体分析のまとめ

大型植物遺体・小型植物遺体の回収・分析により、従来の方法では検討できなかった様々な事柄が検討できるようになった。炭化種実からはこの遺跡でコムギ・イネ・モモ・ドングリなど多様な食用種実が利用されていたことがあきらかになり、炭化材や炭化単子葉植物、植物圧痕からはこれらの炭化物が屋根・壁・構造材など建物の構成要素に由来している可能性が示唆される。このことは、プラント・オパールおよび灰像分析における結果とも整合的である。

花粉分析によって周辺植生の復元が試みられ、遺跡の造営にともなう植生変換の大小や植物栽培などについても議論できるようになった。イネ・ソバ・ベニバナなどが具体的な栽培植物として浮かび上がってきた。イネについては炭化果実を多く確認しているが、ソバ・ベニバナについては未確認である。今後の精査が必要であろう。また、今後周辺植生情報と出土炭化材・炭化単子葉植物の比較することにより、これらの炭化物が近隣に生えていた植物に由来するのか、あるいは人々によって意図的に持ち込まれたのかを議論することができるであろう。(庄田)

5 第171次調査のまとめ

今回の調査では、谷部の上段平坦面に広がる硬化面・赤色化面・方形遺構・石敷などを検出したが、いずれも残存状態が悪く、全体の構造・性格はあきらかではない。しかし、硬化面・赤色化面、方形遺構の一部などは高熱を受けていると考えられることから、これらは高熱を発生する施設、窯・炉の床面や地下構造などの一部である可能性を考えておきたい。その場合、壁体などの上部構造は完全に破壊され、全く残っていなかったことになる。

出土遺物からみても、今回の調査区内で何を生産していたかは不明といわざるを得ない。鍛冶関連遺物の出土は、いずれも谷埋立土SX230内に限られる。谷部の主要な遺構については埋土などを持ち帰り、水洗、篩いがけなどにより微細遺物まで詳細に検討したにも関わらず、製品と確定できる遺物は出土しなかった。しかし、調査区内より大量に出土している炭は一つの候補となろう。

土器の接合関係からは、第75-2次調査で検出した7世紀中頃の焼土層SX037と炭溜りSU250の密接な関係が示唆される。また、炭混層SX201と炭溜りSU250でも出土土器どうしが接合した。土器の出土状況や接合関係を考慮すると、調査時に炭溜りSU250と認識した層には、建物SB254周辺の整地層中で粉炭を多く含む層と、炭混層SX201と一連で堆積した層が混在すると考えられる。下段平坦面SX232の施設が壊され、その整地層中で粉炭を多く含む層が露出したところに、炭混層SX201と一連の層が堆積した状況が推定され、これらが焼土層SX037へと続いていく可能性を考えておく。

ただし、焼土層SX037からは、焼けた建築部材や比較的大きな焼土塊が出土するなど、炭混層SX201、炭溜りSU250と様相が異なる点もあり、今回の調査成果でこれらの関係を具体的にあきらかにすることは難しい。谷SX200や炭溜りSU250、炭混層SX201がさらに延びると考えられる、今回の調査区の西側や南側の未調査部分を調査すれば、手がかりが得られるものと期待される。

今回の調査では、7世紀前半から中頃までに、従来の甘樫丘東麓遺跡の調査で確認していた石垣・建物・塀などが展開する部分とは性格の異なる場、工房的な施設の一部が、谷入り口部付近に存在した可能性が高まった。遺跡の全体像を考える上で、貴重な成果である。(清野)

6 第177次調査

概要 甘樫丘東麓遺跡では、昨年度の第171次調査(前節まで参照)を含め、合計9次にわたり発掘調査をおこなっている。これまでの調査地は、主として東南方へと開く谷のほぼ全域にあたり、7世紀の建物遺構や石敷・石垣などを検出してきたが、第177次の調査地はこの谷の北辺を画する丘陵の尾根上(A区)と、その東側の狭い谷(C区)、そして両者の間の谷壁斜面の一角(B区)にあたる(図144)。これらの発掘調査は、歴史公園内における整備事業にともなうものである。A区・B区の発掘調査はすでに完了し、C区の調査は2013年1月10日より継続中である。

A 区

歴史公園内における地盤改良(盛土)の事前調査。尾根上の平坦地の中央に東西約23m、南北約17mの調査区を設け、さらに遺構の存否を確認するための拡張区を調査区の北側2ヵ所に設けている(図163)。調査面積は約211㎡で、調査期間は2012年12月3日から2013年1月17日である。

調査地は尾根上の平坦地で、調査前は公園の堆肥置き場として使用されていた。この平坦地は、基盤層(花崗岩)に達する大規模な削平をすでに受けていた。本来の地形は平坦地の北辺に土手として残り、そこには花崗岩の風化土が露頭しているものの、これより北側は尾根の北斜面である。この削平ののち、盛土により平坦地を東へと拡張している。切土高は判明するかぎりでは1.2m以上、いっぽうで盛土は東端で1.9mの厚さがある。

この盛土は下部(ビニル・化学繊維の布片を含む黄褐色土:盛土①)と中・上部(ガラ・碎石等を多く含む客土:盛土②)とに分かれ、①と②の間には改良剤によって硬化した厚さ5cmほどの碎石層がある。盛土①の直下には化学繊維の布片を多く含む薄い旧表土があり、柑橘園の開墾時(1962年に開墾完了:川原柑橘園記念碑より)以降のものともみられる。これより下位は花崗岩で、遺構面・包含層は一切残らない。

削平面からは4基の現代土坑を掘り込んでおり、腐葉土と1990年代後半以降のゴミで埋めている。これらが削平後に重機で掘削した穴であるのはあきらかで、それは改良剤入りの碎石層を敷いた後である。その他、調査地

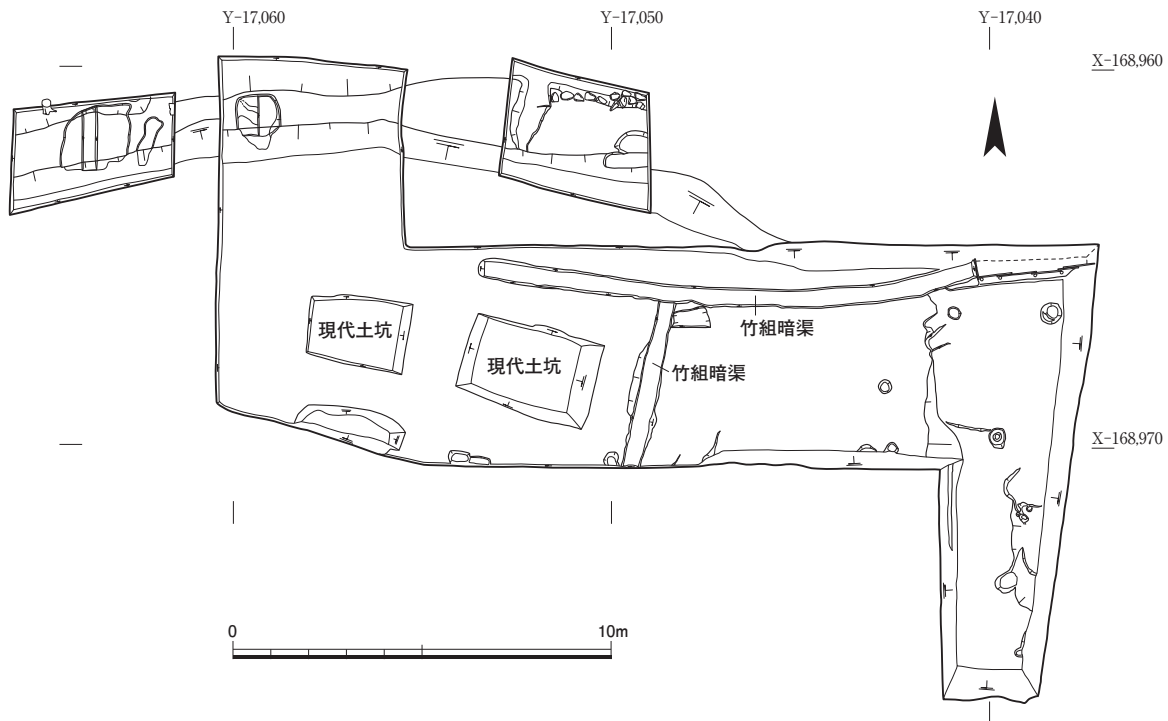


図163 第177次調査A区遺構図 1:200

北辺に残った地山の土手では、2ヵ所に拡張区を設けて遺構検出に努めたが、時期不明の石垣を部分的に検出したのみで、明瞭な遺構は確認できなかった。遺物の出土もごく少量である。

B 区

A区とC区との間、丘陵の東斜面に東西9.7m、南北3.0mのトレンチを設け、これをB区とした(図164)。調査面積は約24㎡で、調査期間は2012年12月6日から同年12月21日である。B区の調査では、第161次で検出した柱列SA210・211に関連する区画施設の検出が期待された。

現在のB区付近は、20°程度の勾配で東へと傾斜する緩斜面で、調査区の東端と西端とで約3mの高低差がある。調査の結果、調査区の西端付近で地表下約2.0mまで、東端では地表下0.5mまでは近現代の盛土で、この土層からはガラス瓶が出土した。

近現代の盛土の直下には薄い旧表土層があり、この土層は調査区の西端で急激に東へと傾斜し、そこからは緩やかに東へと下る。つまり、旧表土が形成された時点で、B区付近は雛壇状に造成されていた。また、旧表土より下位には灰褐色土(古代から中世の土器を若干含む)、褐色土(無遺物層)が堆積しているが、遺構・基盤層は確認できず、掘削深度が3mに達した時点で調査の継続を断

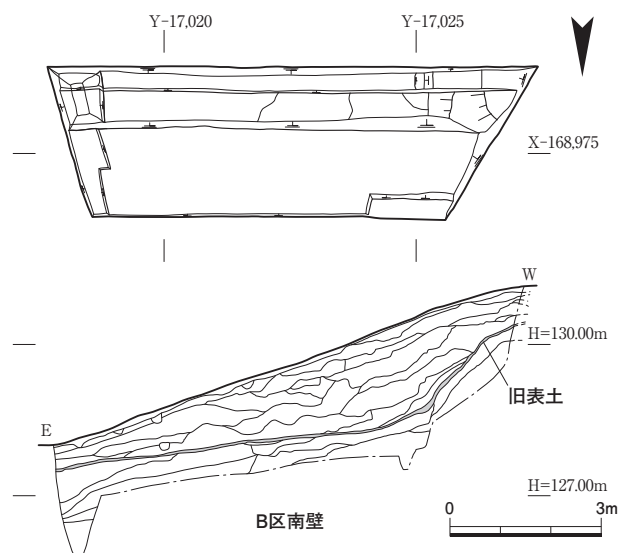


図164 第177次調査B区遺構図・土層図 1:150

念した。

以上、A・B区では、柑橘園の開墾(1962年)にはじまり、国営公園化を経て現在にいたるまでの地形改変により、本来の地形が大きく損なわれていることが判明した。

(森川 実)

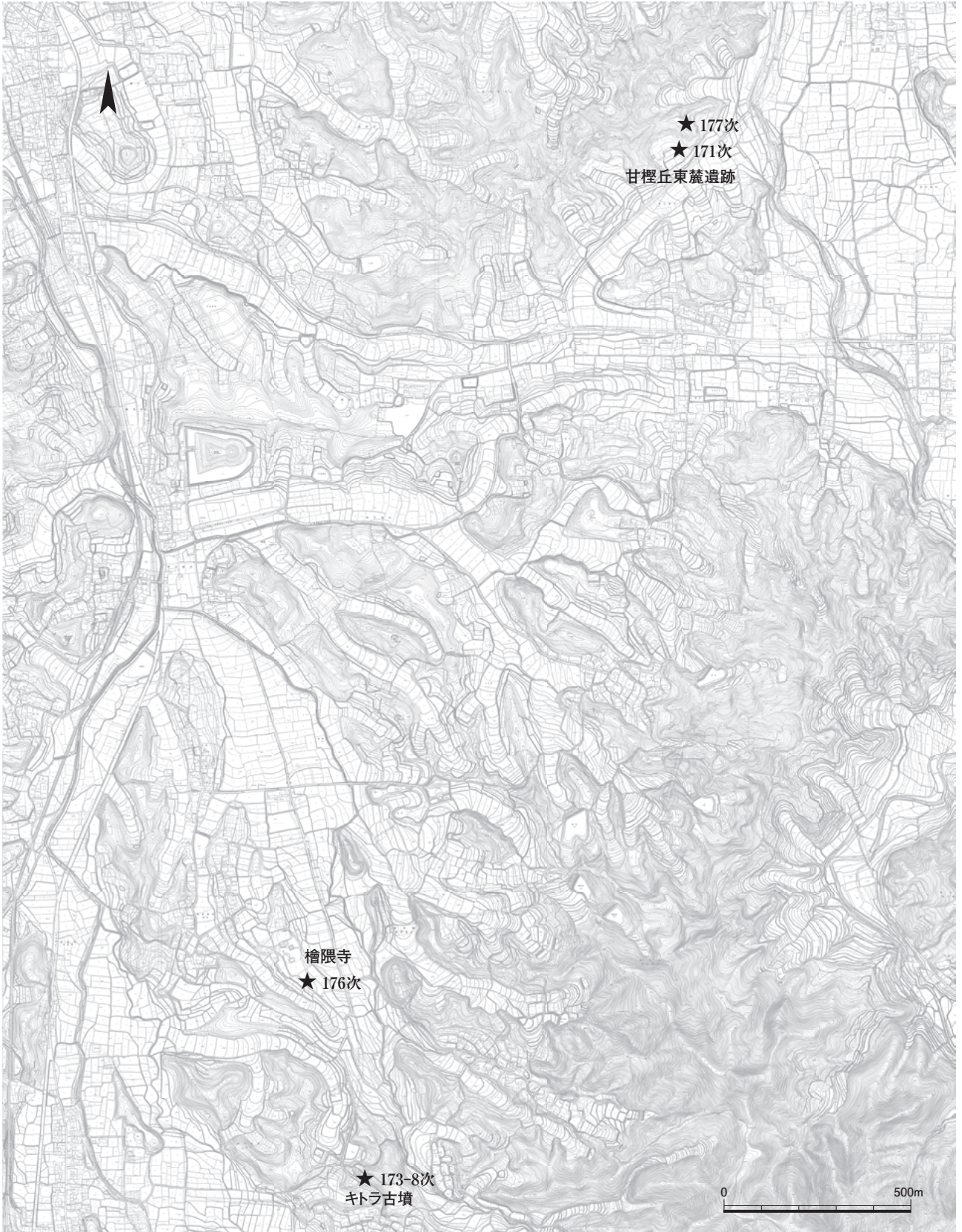


図165 檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000